

「座敷の成立と香道」

徳川美術館専門参与 佐藤 豊三

A 座敷の成立

（古く、室内が板敷のところ、しとね・畳・円座などを置いたところからいう）
 とどまる場所。座敷の場所。宴会の場所。能楽で、見物席をいう。古い呼称。能楽の敷き詰めたへや。特に客間。宴席のとりまわし。酒席での客への対応。芸人、芸妓などが客席に招かれること。監房をいう。盗人仲間の隠語。小学館 昭和四十九年）

B 唐物趣味

1 『建武式目』建武三年（一三三六）
 『可被制』群飲供遊一事
 『會所』會所 寢殿造りから書院建築へ 會所建築
 『會所の有様』
 『喫茶往來』「喫茶之亭」(要旨・原漢文)
 正面の壁面には左側に彩色の佛像、右側に墨絵の観音が掲げられ、脇に掛けた普賢と文殊の画像、面鏡には寒山と拾得の画が銅の花瓶のせられて置かれた。また、錦織で飾った机には鑰石(黄銅)の香匙・火箸が置かれていた。来客用の胡床には豹皮(黄銅)の竹椅には金沙がかけられていた。所々の障子には種々の人用の唐絵(商山四皓・龍虎・夢花白鷺柳絮紫鸞)が掛けられた。香台には朱・堆紅の香箱が置かれ、茶壺には袋に納められた根柢が高尾の葉茶が詰まらされている。北壁の下には一対の屏風が飾られて、その中に銀子(釜)があり、賭物や飲物が並べられていた。悉く以て漢朝之丹青」中国製の美術品 唐絵唐物

C 書院造

従来「書院造」の特徴として、座敷飾りの原典と呼ばれてきた伝書『御飾書』や『君台観左右帳記』に記された義政の邸(東山殿)の常御所・會所の構造などをもとに、次の三点が挙げられていた。
 (1) 引き違い襖による間仕切りが多くなり、畳を常に敷きつめ、必ず天井を張るようになったこと。
 (2) 広間と呼ばれる接客用の客室が設けられたこと。押板・書院床・棚のある床の間が発生したこと。

D 座敷飾り

『御飾書』『君台観左右帳記』の飾り形式
 押板飾り 三幅対・三具足 脇花瓶
 違棚飾り 五具足飾り・諸飾り 四幅対・二幅対
 書院床飾り 移動式と造り付け、のちに造り付けが主流
 造り付けの机

1 床の間

室町時代 普通の間は押板・違棚・書院床を伴い、通常は畳敷の桃山時代以降の機能を持つ。押板床と上段の間「床の間」の異千利休の野村宗寛宛伝書、天正九年(一五八一)「神谷宗湛日記」天正十五年(一五六二)「御膳召上り候。御茶の時、下は降りさせられ云々」

2 「座敷の出現」による変化
 * 完全な畳の上の文化の再構成を促す。伝統芸能の成立。
 * 風俗・習慣の上段の間。身分を明確化する。
 * 「座敷」の成立は、権力の可視化、権威付け。
 * 権力者(足利将軍)の成立は、権力の可視化、権威付け。
 * 権力者(足利将軍)の成立は、権力の可視化、権威付け。

身分を象徴的に、具体的に誇示し得る場として機能し、利用された。

二 日本の香りの歴史

A 仏教伝来と香り
 『日本書紀』欽明天皇十四年(五五三)夏五月の条、樟木が河内の海岸に漂着し、それを天皇の命によって仏像の造りに用いたとある。
 『流古天皇三年(五九五)夏四月の条。島の人、沈水を知らずして、薪に交(か)てて竈に焼く。その烟気遠く薫。則ち異なりとしてこれを献する。』
 皇極天皇元年(六四二)秋七月、蘇我大臣、手雨乞いで、百濟大寺で僧侶に説経させ、「蘇我大臣、手に香鑪を執りて、香を焼きて願を發す」
 同書 同条に、「内裏の仏殿」と宮中仏殿の初見の記事がある。
 同書 天智天皇十年(六七二)冬十月の条、
 『是の月に、天皇使を遣して袈裟・全体・象牙・沈木香・梅檀香、及び諸の珍財を法興寺の仏に奉らしめたまふ』

* 「大安寺資材帳」天平十九年(七四七)
 樹脂 沈香・棧香・薰陸香(乳香)・蘇合香
 白檀・丁香香
 樹木 青木香・零陵香・甘松香・霜香
 動物 麝香
 調合香料 百和香

B 王朝文化と香り

1 香の用い方
 * 奈良時代
 正倉院伝来「銀薫炉(銀製鞠型香炉)」「銅薫炉(銅盃朝型香炉)」「空薫物、香を室内に充滿、衣服に焚きしめる」
 * 平安時代
 空薫物では、薫物(たきもの)、「練り香」が中心。
 薫物は沈香木の粉粒・麝香・龍香などの動物性の香を始め様々な香料を混ぜ合せ、粘着料で固めた香。複数の香料を調整した芳香物質。
 2 香の鑑賞
 * 奈良時代
 大作家持 雨にうづるひぬらむ(三九一六) 鳴く夜市原王 梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ
 * 平安時代
 郷土の句に「古今和歌集」梅・桜・山吹・藤袴・菊・橘などよみひとしらぬ 五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする 夏歌 一三九
 王 結ぶ袖の香、衣服に焚きしめた薫物の匂いと花の匂いとを日常に満ちさせていたことになり、彼らの生活から切り離すことが出来ないほどに日常化した。

C 座敷の香り

『異制庭訓往來』南北朝時代成立
 其名多しといえども、伽藍木・妬伽羅・宇治・鳥羽・山陰。

● 「源氏物語」若紫と「花宴」の空薫物に関する箇所を抄出
 (若紫)「そらだきもの、心にく、薫りいで、名香の香など、句も、心づかひすべかめり。君の御追風、いと殊なれば、うちの人々たるけはひは、源氏の追風用意、異なつた香り」と花宴は、立ちおくれ、いままで、心にく、奥まりたりは、やむごとなき御かた、物見給ぶとて、この戸口は、占め給へるなるべし。空薫の室内充滿

(梅枝) 「御方々の合せ給ども」
 「薫物合せ」薫物合せの参加者は互いに独自の薫物を作り、焚き、その香りの優劣を競う。単に香りの優劣を競うのではなく、参加者の教養・品性、あるいは季節・場所などを関連させ、それら全体の中で香りを楽しむ。
 薫物合せは、詩歌や故実と関連性を持たせることによって、文学的要素を増し、王朝人の遊戯として流行した。
 * 「梅枝」に出てくる薫物の名称
 * 「薫集類抄」十一世紀
 梅花・黒方・侍従・梅花・荷葉
 * 「梅枝」侍従・梅花・荷葉
 * 「後伏見院新宸翰薫物方」
 「常に用いるは先六種なり。梅花・黒方・侍従・落葉・菊花・荷葉なり」
 四季の花や木、景物になぞらえて、四季の変化と自然環境の中に匂いをはめ込む。それはまた和歌・文学の世界でもある。

